

〈研究ノート〉

温泉鉱泉統計調査にみる富山県諸温泉

若林 秀行

Study on Various hotsprings of Modern Toyama Prefecture
by “Hot spring mineral spring statistics investigation”

Hideyuki WAKABAYASHI

はじめに

明治維新を経て近代に入ると、明治政府の富国強兵政策・殖産興業政策の下、工業が発展し、都市が成長して中産階級が生まれ、温泉地もこうした社会・経済情勢を反映して、従来の湯治場（療養温泉地）としての機能だけではなく、都市住民の保養の場、更に大都市に近接した温泉地では慰安の場ともなっている。

富山県内に於いても、日清戦争による好景気の影響を受け、明治28年・29年頃に資金力を持った温泉経営者によって温泉への通路の改善や、施設の改良、サービスの向上などが行われ、温泉はそれまでの湯治場としての機能だけではなく、避暑などの目的でも利用されるようになっていく。

本論は、明治・大正期に行われた温泉鉱泉統計調査から、明治・大正期の富山県内諸温泉の入浴客数や交通など温泉を取り巻く状況を分析し、更に富山県の隣県にして、北陸を代表する温泉をいくつかも有する石川県と比較検討することを目的としている。

I 調査の概要について

(1) 『日本鉱泉誌』¹⁾

『日本鉱泉誌』は、明治19年に内務省衛生局によって発行された、全国の鉱泉に関する統計調査である。この調査書は、明治14年にドイツのフランクフルトに於いて開催された鉱泉博覧会に、日本が出品するために、各府県から集めた資料を基に作成されたもので、日本で初めての全国規模での鉱泉調査である。

ただしこの調査は、各府県ごとに別々に行われたものを基礎にしているために、基準が統一的で

はなく、入浴客数のデータは基本的には明治11年以後、2～3年の平均値であるとされているが例外も多く、また有名な温泉は概ね調査対象となって入るものの、未調査の場所も多く、序文中にも「將ニ他日ニ埃テ纂輯セントス」という記述があり、完全な調査であるとは言い難いが、同時期の温泉利用者数や交通状況などを全国的に把握できる唯一の史料であることは間違いない。

(2) 『全国温泉鉱泉ニ関スル調査』²⁾

『全国温泉鉱泉ニ関スル調査』は、大正12年3月30日に発行された、全国の温泉・鉱泉に関する統計調査である。この調査書は、大正10年12月27日付衛乙発第53号に基づいた衛生局長官の照会に対する各地方長官の回答に基づいて作成されたもので、全国の温泉・鉱泉の名称・所在地・管理方法・設備概要・明治44年から大正9年までの10年間の男女別平均浴客数、分析表および効能、交通機関が記されている。

この調査書は前述の『日本鉱泉誌』のように鉱泉博覧会への出品リストを再編集して作成されたものとは異なり、より正確に温泉鉱泉の状況を全国規模で把握することを目的として作成されており、正確性では『日本鉱泉誌』を大きく上回っている。

II 『日本鉱泉誌』の分析

ここでは、『日本鉱泉誌』を利用して、明治初年の富山県内の温泉に関する分析を行う。

(1) 交通機関

明治10年代中後期には、首都圏や関西地方など、一部の地域では鉄道が開業し、箱根一帯の温泉や伊香保温泉など一部の温泉はその恩恵を受けていたが、北陸、特に富山・石川まで鉄道が延長されてくるのは、明治30年台のことであり、『日本鉱泉誌』の調査が行われた期間において、温泉・鉱泉地へ向かうために利用され得る交通機関は、人力車・馬車・馬・徒歩などであった。こうしたことから、この段階では県を跨ぐような長距離での移動を行って温泉に向かうという事例はそれ程多くは無かったものと推測される。

(2) 社会階層

明治17年段階での人口は、富山が702,945人・石川が743,676人となっている。市町村別人口では、上新川郡(含中新川郡)187,206人、下新川郡104,996人、婦負郡70,557人、射水郡(含氷見郡)156,031人、砺波郡(西砺波郡+東砺波郡)187,147人となっている³⁾。更に、同書の調査対象期間からは外れるが、明治25年段階での職業別の人口構成比をみると、第1次産業(農業、水産業)従事者は61.7%、第2次産業従事者(鉱業・工業)は4.5%、第3次産業(商業・交通業・公務自由業など)が33.8%となっている⁴⁾。

(3) 入浴客数の分析

表1は、『日本鉱泉誌』に記載されている富山県内の温泉の入浴客数を表にしたものである。同書の記述によれば富山県下には、これ以外にも10数箇所の鉱泉があるが、調査未了のためにこれを除いたということである。事実、ここには近世以来富山県を代表する温泉であった越中四名湯のひとつである立山温泉が記されていない。明治20年代初頭の立山温泉には、年間2,000から1,500人程度の人々が訪れており、この時期の入浴客数もそれと同程度であるものと推測される。

表1の富山県内諸温泉の中では、山田温泉の35,666人、ついで小川温泉の15,146人、下茗鉱泉の14,735人が1万人を越えている。同書記載の本州の温泉の中で1万人を越える入浴者数を持つ温泉は大規模な部類に入り、特に山田温泉の35,666人は、熱海温泉の34,368人、伊香保温泉の24,883人を上回っており、単純に人数だけを見るならば、東京などの大観光市場を背景にした日本を代表する温泉に匹敵している。

表1 明治初年の富山県諸温泉の入浴客数

温泉	場所(旧)	人数
下茗鉱泉	婦負郡下茗村字下ノ平	14,735
山田鉱泉	婦負郡山田村字下夕瀬戸	35,666
西明寺鉱泉	砺波郡西明寺村字口山	6,513
安楽寺鉱泉	砺波郡安楽寺村字浦山	2,700
井栗谷鉱泉	砺波郡井栗谷村字谷内谷	600
矢波鉱泉	砺波郡矢波村字立場山	1,600
祖山鉱泉	砺波郡祖山村字太平下川原	750
大牧鉱泉	砺波郡大牧村字大倉	3,000
田向鉱泉	砺波郡上梨村所属字向山	50
小川鉱泉	下新川郡山崎村字温田	15,146
西鐘釣鉱泉	下新川郡平澤村黒部山官林字西鐘釣	2,062
西仙人鉱泉	下新川郡平澤村黒部山官林字西仙人	不明

*1 『日本鉱泉誌』中巻308～323頁の記事より作成。

*2 人数備考が「記載ナシ」となっているものは飲用のみに利用されているものか浴場の設置がない鉱泉である。

*3 明治11年より2・3年の入浴客数の平均。

表2は『日本鉱泉誌』記載の石川県の鉱泉の入浴者数である。この段階では、『全国温泉鉱泉二関スル調査』には記載されていない松寺鉱泉が24,812人と石川県で最も入浴客数が多い温泉となっており、また北陸地方の温泉の中で最も古い歴史を持つとされる粟津温泉が19,234と多数の入浴客を集めていることがわかる。これに対して後に北陸五大温泉(山中・山代・和倉・粟津・芦原)と称される、山中温泉や和倉温泉は、1万人以下とそれ程多くの入浴客を集めている訳ではないことがわかる。特に山中温泉は、近世に発行された全国温泉番付の中でも上位に登場する全国的な知

名度をもった、まさに北陸地方を代表する温泉であり、入浴客数が9,900人と決して少ない訳ではないが、この段階においてはそれ程知名度があったとは考えられない温泉よりも少数に止まっている。

表2 明治初年の石川県諸温泉の入浴者数

温泉名	所在地 (旧)	人数
湯涌鉱泉	石川郡湯涌村	9,165
中宮鉱泉	石川郡中宮村字東八谷	1,000
辰口鉱泉	能美郡辰口村字湯ノ壺	15,120
粟津鉱泉	能美郡粟津村	19,234
松寺鉱泉	河北郡松寺村字湯原崎	24,812
深谷鉱泉	河北郡深谷村ジヤミ谷	3,114
倉見鉱泉	河北郡倉見村字坂尻	1,490
岸川鉱泉	河北郡岸川村字禰越堂	1,630
湯屋谷鉱泉	河北郡大熊村字湯屋谷	79
山中鉱泉	江沼郡山中村字鷺ノ巣	9,900
山代鉱泉	江沼郡山代村字薬師山	17,000
和倉鉱泉	鹿島郡和倉村	9,700
狼煙鉱泉	珠洲郡狼煙村字金ヶ崎	200
薬師野鉱泉	羽咋郡新宮村字薬師野	18,000

*1 『日本鉱泉誌』中巻 325～343 頁の記事より作成。

このように、表1・2から明治初年の温泉入浴客数について見てみたが、この段階においては、全国的な知名度や歓楽街の有無などは、入浴客数の増加と必ずしも結びついていないことがわかる。

その理由としては、第1に明治初年の温泉利用者は湯治長期滞在が前提となるため⁵⁾、こうした所謂「療養温泉段階」の温泉利用者が多くなれば、温泉入浴客の延べ人数は必然的に多くなり、逆に避暑・避寒などと称して温泉を利用する⁶⁾保養や歓楽的な目的での温泉利用者は、療養目的での温泉利用者に比較すれば温泉での滞在日数が少ないため、こうした目的の温泉利用者が多い温泉においては温泉入浴者の延べ人数が少なくなってしまうこと、第2にこの段階では鉄道などの交通機関が全国レベルで整備されているわけではないので、首都圏や関西圏などの大観光市場から、北陸地方の温泉に向かうためには、相当の時間と労力を要することになり、どれだけ全国レベルの知名度を持っていても遠距離を移動してまで北陸地方の温泉を利用する人々はそれ程多くはなく、それが必ずしも集客には結びつかないということの2点が考えられる。

ただし、この段階においても交通的な側面が全く無視できるわけではない。表3は明治初年の富山県諸温泉の交通状況と入浴客数に関するものであるが、入浴客数の多い山田温泉は富山・高岡という県内で最も大きな観光市場と人力車等も通行が可能な平坦な道で結びついており、下茗鉱泉も富山と結びついていることがわかる。また小川温泉は富山、高岡にそれほど近い訳でないが、舟見・

泊と平坦な道で結ばれており、また魚津、黒部などからも近く、下新川地方にはこれと匹敵するような温泉は当時は存在していなかったこともあって多数の入浴客を集めていたであろうことが推測できる。このように、県を跨いだ長距離移動が行われない段階においても、整備された道路で主要な観光市場（地方都市レベルであるが）と結びついているということは大きな意味を持っていたのである。

表3 明治初年富山県諸温泉の交通と入浴客数

温泉	人数	営業期間	位置	道路
下茗鉱泉	14,735	通年	富山に5里、八尾に1里	○
山田鉱泉	35,666	通年	富山6里 高岡7里	○
西明寺鉱泉	6,513	通年		△
安楽寺鉱泉	2,700	通年	石動に20町	○
井栗谷鉱泉	600	通年	井波に3里	△
矢波鉱泉	1,600	通年	石動に25町	○
祖山鉱泉	750	5～10月	城端に40町	×
大牧鉱泉	3,000	5～10月	井波に3里10町	×
田向鉱泉	50	通年	城端に4里	△
小川鉱泉	15,146	3～12月	舟見に3里、泊に3里	○
西鐘釣鉱泉	2,062	5～10月	魚津に9里、人家に5里	×
西仙人鉱泉	不明	不明	黒部奥山	×

* 1 『日本鉱泉誌』中巻 308～323 頁の記事より作成

* 2 「道路」は道路の状態の事で○は平坦で人力車等の通行可能、△は通行困難、×は極めて険阻にして通行困難。

III 『全国温泉鉱泉二関スル調査』の分析

(1) 大正期の全国の温泉

『全国温泉鉱泉二関スル調査』が発行されたのは大正10年であり、同調査書は基本的には明治44年から大正9年までの温泉・鉱泉利用者数の平均人数を掲載しており、大正時代中期までの温泉鉱泉利用の実態をある程度把握することが出来る。

表4は『全国温泉鉱泉二関スル調査』掲載の全国の温泉入浴者数の県別平均人数を人数の多い順に上から並べたものであるが、これをみると上位に位置しているのは、有馬温泉を有する兵庫県、別府温泉を有する大分県、道後温泉を有する愛媛県、県内に多数の源泉地を有する長野、鹿児島、熊本であり、これについて入浴客数が多いのが富山県、石川県も山形県について9番目に入浴者数が増えており、単純に利用人数で見ると、富山・石川県は全国有数の温泉観光地帯であったと言える。

表4 大正期の全国の温泉入浴客数

道府県名	入浴客数	道府県名	入浴客数
兵庫	1,940,162	鳥取	205,268
熊本	1,168,807	宮崎	169,022
長野	1,133,427	福井	148,309
鹿児島	1,084,340	岐阜	142,272
大分	1,066,547	福岡	133,434
愛媛	1,051,204	青森	128,230
富山	826,704	千葉	101,218
山形	785,520	和歌山	84,386
石川	621,106	岩手	72,624
福島	553,763	長崎	62,583
佐賀	540,160	三重	57,371
静岡	533,482	東京	56,315
山梨	508,994	香川	27,493
山口	498,286	徳島	24,188
岡山	472,931	茨城	20,672
新潟	426,649	大阪	19,930
群馬	374,898	高知	9,520
北海道	345,331	広島	6,221
秋田	333,804	埼玉	5,767
栃木	306,075	奈良	5,300
宮城	281,748	愛知	1,144
神奈川	238,190	京都	0
島根	233,516	滋賀	0
鳥取	205,268	沖縄	0

* 『全国温泉鉱泉ニ関スル調査』より作成

(2) 交通機関

明治後年から大正初年にかけて、富山県内に於いても鉄道開発が盛んに行われている。

明治43年段階で、泊までしか開通していなかった北陸線は、泊一直江津間が大正4年に開通したことにより、関西地方・関東地方という大観光市場と富山県は直結されることとなった。

また明治30年に私鉄として開業し大正9年より省線に組み込まれた中越鉄道により、高岡一城端間が結ばれ、44年には伏木一城端間、大正元年には氷見一城端間と延長され、これにより射水地方・砺波地方は鉄道の恩恵を受けることになり、それにより明治段階では小規模な温泉地があるのみであった同地方に多数の比較的規模の大きい温泉・鉱泉が登場してくることとなった。

また私鉄も次々に開業・距離を延長しており、大正2年に開業した立山軽便鉄道（大正11年よ

り立山鉄道)が滑川—五百石間(大正10年には立山まで延長)を結んだことにより中新川地方が、大正3年に開業した富山軽便鉄道(大正11年より富山鉄道)により富山—稲荷町—笹津間が結ばれ上新川地方が、大正4年に開業した砺波軽便鉄道(大正11年より加越鉄道が、福野—青島間(大正11年に福野—石動に延長)を結んだことにより砺波地方が鉄道の恩恵を受けることとなった⁷⁾。

また鉄道の駅などから温泉地までの間を、入浴客を自動車を利用して輸送することも大正期に始まっている。富山県内に於ける自動車台数は史料の不備により不明な点が多いが、大正3年の段階で4台の自動車が県内に存在している。『日本鉱泉誌』が発行された大正10年の段階では、52台の自動車が存在していた⁸⁾。

(3) 社会階層

大正元年、9年、14年の富山県の人口はそれぞれ738,300人、724,276人、749,243人となっており一旦減少した後に漸増しているもののそれ程大きな変化ではない。石川県に於ける人口もそれぞれ757,600人、747,360人、750,854人と富山県と同様それ程大きく変化しているわけではない。因みに東京府においては大正元年の3,085,000人から大正14年には4,485,144人と大きく増加し、大阪でも大正元年には2,198,000人から3,059,502人と大幅に増加しており、同時期に都市部では大幅な人口増が見られる。

大正10年の都市別の人口をみると、上新川郡66,011人、中新川郡86,312人、下新川郡113,208人、婦負郡72,572人、射水郡101,744人、氷見郡60,794人、東砺波郡90,091人、西砺波郡95,311人、富山市75,089人、高岡市41,309人となっており、明治17年段階と行政区分が変化していることから単純に比較は出来ないが、どの地区も漸増しており、富山市は52,632人から75,089人、高岡市は27,691人から41,309人と、他地域に比べて人口増加の幅が大きく、富山県内に於いても都市の成長が見られたことがわかる⁹⁾。

大正10年次点の職業別人口比をみると第1次産業(農業、水産業)従事者は60.9%、第2次産業従事者(鉱業・工業)は14.8%、第3次産業(商業・交通業・公務自由業など)が10.9%となっており、明治25年と比較すると、第2次産業従事者の割合が大きく増加し、第3次産業従事者の割合が減少している。これは、工場労働者が増加したことによるもので、富山市・高岡市の人口も増加していることから、工業の発展によって都市部においてこうした労働者が大きく増加していたものと考えられる。

(4) 入浴客数の分析

表5は『全国温泉鉱泉ニ関スル調査』の富山県の部分を利用して作成したもので、明治段階では未調査であった温泉・鉱泉が追加してあるため、より詳細な内容となっている。

はじめに越中四名湯について触れると、明治初年の調査では、入浴客数だけならば熱海温泉や伊香保温泉を上回っていた、山田温泉は、大正期には、23,510人と入浴客数を1万人ほど減少させ

ている。この減少は人口の増加や経済規模の拡大やそれに伴う観光需要の増大などを考え合わせると、数値以上に大きな減少であるといえる。これとは反対に1万5千人程度だった小川温泉は、入浴客数を泊本店で58,191人、山崎支店で6,328人合計で64,519人と3倍以上に入浴客数を増加させ、2,000人前後であったと推測される立山温泉は26,675人と、より交通的条件が良いであろう山田温泉を上回る入浴客を集めるまでになっている。また庄川上流にあり、交通条件が極めて悪い大牧温泉は877人と3分の1以下に入浴客数を減少させている。

表5 大正前中期の富山県内諸温泉の入浴客数

温泉名	所在地	浴客数
新湊荒屋鉱泉	射水郡新湊町	79,882
二上鉱泉場	射水郡二上村	43,680
合田鉱泉	上新川郡大久保町	11,541
塩出ノ湯	上新川郡大久保町	5,101
春日鉱泉	上新川郡大沢野町	8,336
立山温泉	上新川郡大山町	26,675
稻荷鉱泉	上新川郡奥田村	7,340
島村鉱泉	上新川郡島村	該当ナシ
生地第一鉱泉	下新川郡生地町	3,030
生地鉱泉	下新川郡生地町	5,030
ラジューム鉱泉	下新川郡魚津村	73,150
愛本鉱泉	下新川郡内山村	15,148
境鉄鉱泉	下新川郡境村	4,987
小川温泉（泊）	下新川郡泊町	58,191
舟見鉱泉	下新川郡舟見町	3,958
黒薙温泉	下新川郡舟見町	1,515
新鐘釣温泉	下新川郡舟見町	437
北山鉱泉	下新川郡松倉村	14,192
小川温泉（山崎）	下新川郡山崎村	6,328
八幡鉱泉	中新川郡高野町	10,000
谷内鉱泉	西礪波郡赤丸村	1,597
川合田鉱泉	西礪波郡石黒村	8,920
頭川鉱泉	西礪波郡國吉村	2,467
西明寺鉱泉	西礪波郡五位山村	不明
法楽寺鉱泉	西礪波郡子撫村	不明
須川鉱泉	西礪波郡子撫村	5,000
湯谷鉱泉	西礪波郡南蟹谷村	1,885
利波鉱泉	婦負郡八番町	1,792
鯨鉱泉	婦負郡八番町	52,490
平林鉱泉	婦負郡保内村	7,772

温泉鉱泉統計調査にみる富山県諸温泉

山吹鉱泉	婦負郡室牧村	6,596
山田温泉	婦負郡山田村	23,510
林道炭酸鉱泉	東礪波郡大鋸屋村	1,827
林道炭酸鉱泉	東礪波郡大鋸屋村	803
城端ラジューム鉱泉	東礪波郡城端町	260,411
大牧鉱泉	東礪波郡利賀村	877
鳥越鉱泉	東礪波郡東山見村	3,620
祖山温泉	東礪波郡平山	1,360
吹上鉱泉	東礪波郡南山見村	34,950
硫黄鉱泉	氷見郡宮田村	24,479
磯部鉱泉	氷見郡八代村	記載ナシ
鐘釣鉱泉	下新川郡黒部奥山	799

* 1 『全国温泉鉱泉二関スル調査』より作成

* 2 鳥村鉱泉は大正 10 年に営業を開始したため、本調査の対象期間外であり、そのため該当ナシとなっている。

表 6 大正期の石川県主要温泉の入浴客数

山中温泉	140,194
山代温泉	85,425
片山津温泉	37,690
粟津温泉	81,006
和倉温泉	94,967

* 『全国温泉鉱泉二関スル調査』より作成

小川温泉は、明治 20 年代中期以降、経営者である伊東祐賢が道路を整備し、施設を拡充するなど温泉の発展を期しており、大正元年に発生した大洪水によって温泉施設の全てが流出するという不幸に見舞われたものの、大正 4 年に富山―直江津間が結ばれ、前線開業する予定であった省線北陸線の泊駅の近辺に本店を設置し、交通の便を格段に良くし、更に組織を株式会社化して広く資金を募り、施設の改良やサービスの向上に努め、それによって入浴客数を増加させているものと考えられる。

立山温泉は、明治 30 年に文化 12 年より同温泉を経営していた深見家がその経営権を手放すことになったものの、明治 39 年から立山温泉周辺の崩壊地に施されることとなった富山県営砂防事業に積極的に協力し立山温泉地内に砂防事務所を設置することで、工事資材運搬のための温泉の通路の改良などを行いまた工事関係者に物品販売などを行っており、どの程度の利益を得られていたのかは不明であるが、新聞紙上にも避暑の適地として度々紹介されるなど、多くの注目を集めており、そのことが入浴客数の増加に繋がっているものと推測される。

こうした中で小川温泉を上回る入浴客を集めているのが城端ラジューム鉱泉と（魚津）ラジュー

ム鉱泉、そして新湊荒屋鉱泉である。中でも城端ラジウム鉱泉は 260,411 人とこの鉱泉一つだけで、富山県の全温泉鉱泉の入浴客数の 4 分の 1 以上を占めている。またこの入浴客数は、伊香保温泉の 227,064 人、熱海温泉の 165,085 人を上回っており、道後温泉の 1,030,237 人には遠く及ばないが、全国の有名温泉地に匹敵する人々を、全国的知名度では数段劣る事になる城端ラジウム鉱泉が集めていたということは驚きである。

昭和 8 年に日本温泉協会によって発行された『温泉大鑑』によれば、この時期、ラジウムの放射能が医療的效果が多いことが判明するとともに温泉に就いても放射能が喧しく言われるようになった¹⁰⁾とあり、この時期にはラジウムを含んでいる温泉の医療効果に大きな注目が集まっていたことが推測される。そのため、全国各地にラジウムを含むことを宣伝する温泉が多く登場しており、小川温泉も新聞紙上で成分中にラジウムが含まれていることを宣伝しており、そのことによっても入浴客数が増えているものと推測される。ただし、ラジウムは実際には殆どの温泉に含まれており、小川温泉に含まれるラジウムが、医療効果を得られるだけの量であったかは疑問である。

勿論、十分な効能を得ることが出来る温泉もあったのは事実であろうが、新しく海外から入ってきたラジウム鉱泉という種類の鉱泉の効能に対する過大な期待があり、それにより「ラジウム鉱泉」という名称をつけることが大きな宣伝効果を持っていた事は事実であろう。

因みに新湊荒屋鉱泉は入浴料が一泊 15 銭と極めて安価であり、長期間湯治を行う人々が多く滞在し、それによって入浴客数が増えているのであろう。

このように、同時期の富山県内の温泉鉱泉入浴者の上位三温泉は、ラジウムという衣料効果の極めて高いと考えられていた温泉や、安価に長期滞在できる温泉であり、富山石川は全国有数の温泉観光地帯であると先述したが、こうしたことを踏まえると、富山県は一大療養温泉地帯であったということが可能であろう。

こうして療養温泉が発展する一方で、避暑などの保養目的の入浴客を集めることによって、小川温泉などは入浴客数を伸ばしているが、こうした比較的短期間温泉に滞在する人々を対象とした温泉開発では、富山県は隣県に比べて遅れていたといわざるを得ない。

ここに登場する石川県の諸温泉は、新興の片山津温泉を除けば、全て富山県最大の「保養温泉」である小川温泉の入浴客数を大きく上回っている。

山中・山代・片山津温泉は北陸線大聖寺駅より乗合自動車の定時往復を行い、山中・山代・粟津温泉は大聖寺駅から温泉地へ電車の路線を開設するなど交通の便を良くし、更に明治 30 年より北陸線で直結された関西地方の新聞紙上に於いて宣伝活動を行うなど、大観光市場からの入浴客の誘致を期している。先述の通り、富山・石川両県の人口は明治期と比較しても漸増しているに過ぎず、大きく人口を増加させていた関西地方の大都市から入浴客を呼ぶことは重要なことであった。

こうして交通面が格段に良くなるとどれだけのサービスが提供できるかが問題となるが、入浴客へのサービスの点においても、泊町から芸妓を派遣してもらっているに過ぎない小川温泉に対して、

山中温泉の芸妓は近世以来の伝統を持ち、それ以外にも大正中期までに劇場・料亭、風光明媚な景色など娯楽面でも富山県内の温泉は大きく引き離されていたのである¹¹⁾。

こうして山中温泉をはじめとした石川県の温泉は、交通網が未整備であった明治初年の調査では小川温泉を多少上回るか、下回っていた入浴客数を数万人単位で引き離すまでになっているのである。このように、大正中期の段階で、富山県内の温泉は観光開発という側面で、すでに石川県内の温泉の後塵を拝するようになっていたのである。

IV 総括

本論では『日本鉱泉誌』、『全国温泉鉱泉二関スル調査』という2つの統計調査を利用して、明治初年と大正前中期の富山県諸温泉の入浴者に関して分析を行った。

山田温泉の事例を取り上げると、明治初年の段階では、鉄道などの交通網が整備されておらず、温泉への交通手段が人力車や馬など長距離の移動に向いていないものしか利用することが出来ず、富山や高岡に比較的近くて設備のよい山田温泉に多数の入浴者が集まり、全国有数の集客力をもつ温泉となっている。しかしながら大正期になり、全国規模で鉄道網などの交通手段が整備されてくると、近隣地域の設備があまり良くなく、また知名度もそれ程高いわけではない温泉ではなく、有名な温泉に出かけることが可能となり、経済規模や人口が拡大しているにも拘わらず、山田温泉は入浴客数を1万人減少させている。

この様に衰退する温泉がある一方で、明治初年の隣県石川県の山中温泉は、近世に温泉番付で上位に上げられるほど有名な温泉であったにも拘わらず、入浴客は9,900人と、1万人を割り込んでいたが、鉄道網を積極的に整備し、且つより良いサービスを提供することで、大正期には14万人と、14倍以上の入浴客を集める、大温泉地となっている。

『全国温泉鉱泉二関スル調査』の入浴客数を単純に見ると、富山県は全国有数の温泉地帯であるが、多数の入浴客数は、交通網やサービスを除いても入浴客が訪れることになる療養温泉、特に当時の富山県の場合は、海外から学説が輸入され、医療的効果に一時的に注目が集まっているに過ぎない「ラジューム鉱泉」によって支えられているものであった。

富山県内に於いても、小川温泉などのように療養面ではなく、保養的な側面を宣伝することで発展した温泉も存在したが、その成長度は石川県の主要温泉には及ばず、以降現在に至るまで、その差は埋まっているとはいえない。

(わかばやし ひでゆき・高崎経済大学大学院地域政策研究科博士後期課程)

註釈

- (1) 内務省衛生局、明治19年2月発行。
- (2) 内務省衛生局、大正12年3月発行。
- (3) この段階では富山市は上新川郡と婦負郡に、高岡市は射水郡に含まれている。(富山市52,632人、高岡市は27,691人。)、『富山県史』近代統計資料35参照。
- (4) 『富山県史』近代統計図表38頁。
- (5) 『日本鉱泉誌』の記載内容からは長期滞在者の有無は判断できないが、明治23年の宿帳が現存しており宿泊客の動向を詳細に知ることが可能な立山温泉の宿泊客の平均滞在日数は7日、最長滞在期間は23日に及んでいる。
- (6) 保養目的の温泉利用者は都市化や交通機関の整備と密接に関連しており、新聞の動向をみると、首都圏では明治10年代後半から30年代にかけて伊香保・熱海・箱根諸温泉などをこうした目的で利用する人々が増加するが、富山県では明治30年台以降に増加することになる。逆に言えばこの段階では、そうした人々は少数派であった。
- (7) 『富山県史』近代統計図表267 - 273頁。
- (8) 『富山県史』近代統計図表17頁。
- (8) 『富山県史』近代統計図表265頁。
- (9) 『富山県史』近代統計図表17、35、38頁。
- (10) 『温泉大鑑』8頁。
- (11) 『山中町史』285 - 294、315 - 320頁参照。

【主要参考文献・史料】

- 『富山県史』通史編5 近代上(富山県 昭和56年)。
『富山県史』近代統計図表(富山県、昭和58年)。
『加賀市史 通史編 下巻』(加賀市史編纂委員会編 昭和54年10月)。
『観光地理学』(浅香幸雄, 山村順次 昭和49年9月)
『新観光地理学』(山村順次 原書房 平成16年2月)
『温泉大鑑』(昭和8年 日本温泉協会)。
『日本温泉大鑑』(昭和16年 日本温泉協会)。
『日本鉱泉誌』(内務省衛生局、明治19年2月発行)。
『全国温泉鉱泉ニ関スル調査』(内務省衛生局、大正12年3月発行)。
『山中町史』(若林喜三郎編著 山中町史刊行会 昭和34年)。